

令和 5 年 6 月 14 日現在

機関番号：32604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00503

研究課題名(和文) 日本関係の近世ラテン語文学 - 成立の文脈と未校訂写本の研究 -

研究課題名(英文) Early Modern Latin Literature on Japan - A Study on its Context of Production and Unedited Manuscripts

研究代表者

渡邊 顕彦 (Watanabe, Akihiko)

大妻女子大学・比較文化学部・教授

研究者番号：60612025

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：この研究の主要な成果は「Japan on the Jesuit Stage: Two 17th-Century Latin Plays with Translation and Commentary」と題して出版された単著書である。この著書で研究代表者はコブレンツで1625年に、またミュンヘンで1665年に作成・上演された2点の日本関係ラテン語劇の文献学的に正確な校訂版を完成させた。また校訂版にはラテン語原文だけでなくその英語訳、および英語の解説・注釈も付随しており、これら作品の歴史的・政治的・社会的・教育的・文化的背景を説明している。また他にも研究期間中複数の研究報告や論文を発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

この研究により、17～18世紀に欧州を中心として当時の教養語であったラテン語で作成された文献群の中で日本宣教がどのように受容され、再拡散されていったのか、学会未見の一時文献2点を中心として詳細に検証することができた。近世ラテン語文学はいわゆる異教古典の伝統を色濃く引き継ぎながらも、キリスト教化した西欧を中心に作成され読み継がれていった多様性に満ちた伝統である。この近年再度注目をあびている伝統の中に、古代地中海からも西欧からも遠く離れた日本の情報がどのように受容されたのかを調査することは今後もヨーロッパの多様性および日本との歴史的繋がりを理解するため重要であると考えられる。

研究成果の概要(英文)：The major outcome of this research project was the publication of the book Japan on the Jesuit Stage: Two 17th-Century Latin Plays with Translation and Commentary. In this book, the PI gave a philologically accurate edition of two Latin plays on Japanese subjects, one performed in Koblenz in 1625 and the other produced in Munich in 1665. The edition contains not only the original Latin texts but and English translation as well as introduction and commentary also in English. In the introduction and commentary, the PI sketched the historical, political, social as well as educational and cultural contexts in which the plays were produced. There is good reason to hope that the edition will be a precursor to more studies not only on drama but Latin works in other genres on Japanese subjects, a great number of which remain to be investigated. The PI also published several articles and gave academic presentations during the research period.

研究分野：西洋古典学

キーワード：近世ラテン語文学 イエズス会劇 キリシタン文化学

### 1. 研究開始当初の背景

日本のキリシタンを扱った近世ラテン語演劇については国内外の研究者たち(竹中昌宏、Charles Burnett、Margret Dietrich、Dorothea Weber、Thomas Immoos)が特に1990年代ある程度史料収集と研究を進め、2000年代初頭にかけて論文、単著、共著書など成果が出始めていたが、中心的役割を果たしていた Immoos と Dietrich が2000年代初頭に相次いで物故したことから下火になっていた。そこで2016年から18年にかけて Florian Schaffenrath と渡邊が共同で代表者となり、日本側から大場はるか、パトリック・シュウエマー、オーストリア側からはマリア・マチウエスカも加わり、「イエズス会演劇における日本 - ドイツ語圏と他地域 - 」と題して JSPS-FWF 二国間交流事業共同研究を行い、このテーマの研究を復興させることを試みた。この二国間交流事業の主要な成果としては2018年6月にウィーンにおいて各国より16名の研究者が発表した学会を開催し、またこれらの発表を基に『Japan on the Jesuit Stage: Transmissions, Reception, and Regional Contexts』と題してオランダの学術出版社 Brill より共著書としての論文集準備にとりかかった。この共著書は2021年に出版されたが、その渡邊が関わった部分の準備には本研究の助成も受けている。このように、本研究は一時期、特に1990年代に別のグループが手掛けていたが諸事情により途切れたものを本研究代表者が関わるグループが継続し、それをまた同じく本研究代表者が継続したものである。ただ特にラテン語の1次文献、特にそのうち個々の情報量は多いが残存数は少ない脚本手稿の、注釈・解説・翻訳付きの文献学的に正確な校訂版は Burnett と竹中が1995年に出版したものが今まで唯一存在した類書であった。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、日本のキリシタン宣教を扱った近世ラテン語文献のうち、学界未見であり手稿(写本)状態でしか現存しない作品2点の内容を、文献学、史学、キリシタン文化学などの最新の手法や見地から明らかにすることであった。これら作品はドイツのミュンヘンおよびコブレンツに現存し、デジタル画像を研究代表者が入手していたものの、詳細かつ正確な解析のためには現地に赴いて現物を実地で調査する必要がある。また最新の文献学など関係諸分野の知見を得るため、国内外の学会に出席し発表を通して本研究テーマを各界の研究者に伝え、学術交流を通して他研究者の助言を得ることも必要であった。

### 3. 研究の方法

本研究は対象である17世紀手稿の電子画像をミュンヘンとコブレンツの文書館より入手し、その文字起こしをして内容を確認することから始まった。ただ双方とも難読箇所が相当あり、特にコブレンツ手稿は複数の、おそらく学生達の書いたバージョンが混在するものであるため、研究第2年度に現地に赴いて現物を確認し、研究第3年度に入ってからも在欧の研究協力者(Antonia von Karaisl氏)をコブレンツ文書館に派遣し、当該手稿およびそれと重複する内容をもつ複数の別の劇の脚本手稿を新たに確認、スキャンし、同協力者の助けも得て文字起こしや比較をする必要がある。これらの理由により、文献学的に満足できる校訂版が完成したのは研究3年度目のことであった。

また、手稿の内容を正確に知るためにはその成立した文脈を知ることが肝要である。このため、研究開始時よりイエズス会演劇全般のみならず、これらの劇2点が成立したミュンヘンおよびコブレンツの学院の成立当時の記録を調査し、これらもラテン語手稿で残っているものが大多数なのでミュンヘン、コブレンツ、それからケルンの文書館にあるコブレンツ学院年代記も現地で調査あるいは電子画像を取り寄せ、文字起こしし内容を確認した。ほか、多数の関係

2 次文献も国内外で調査した。特に研究 2 年度目に所属大学より在外研究の許可を得て 7 ヶ月間ウィーンに滞在し、同市の各種図書館や同地ほかドイツの史料を渉猟し、現地の研究者複数名とも繰り返し打ち合わせできたことは研究に大きな進展をもたらした。

研究年度 3 年目は上記の成果を整理し、英語で解説、注釈、翻訳を作成することの大部をあてた。順序としては一次史料の文字起こしのラテン語正書法を統一し、これに翻訳を付け、関係 1 次・2 次文献の内容に基づき史学的、文献学的、キリシタン文化学的な側面から解説を加え、また適宜注釈をつけた。まとめた原稿は、在欧の協力研究者たちより紹介された英国の出版社 Bloomsbury の編集者に提出し、複数回の点検修正をへて 2022 年暮れに出版された。

上記作業を展開している最中も、関係分野の研究者に作業状況を適宜知らせ、アドバイスをもらうことが肝要だと考えていたので在外研究機関以外にも研究初年度には国内外で複数回の学会参加・発表を行った。ただ研究 2 年度目より新型コロナウイルス感染が世界中に広まり、同年度は参加予定していた全ての学会が中止あるいは延期となった。しかし研究 3 年度目より、まずオンライン学会が再開され始めたのでこれに複数回参加し、さらにコロナ禍が大きな原因で学会関係の予算執行が遅れたので研究期間の 1 年延長を希望したところ幸い認められた。研究 4 年度目となる 2022 年には国際学会もかなり対面で復活し、その結果欧州の学会に参加したり在欧の研究機関を訪れて講演を行うことが出来た。日本学術振興会の助成により上記の方法で研究ができたことを感謝したい。

#### 4 . 研究成果

この研究の第一の成果は上記 2 点の日本を扱った 17 世紀ラテン語劇の内容解析でありそれを単著書にまとめたものの出版である。この単著書で扱った劇 2 点の内容や背景を以下簡便に説明する。

コブレンツで 1625 年に上演された日本人殉教者関係の劇は、内容を精査したところ、1613 年に長崎近郊の有馬で起きた事件を題材にしていることが判明した。いわゆる本多(あるいは本田あるいは恩田)兄弟と、兄の息子二人が主に長崎代官長谷川藤広またの名左兵衛の指金により、キリシタン信者であることを理由に殺害されたとされる事件である。これは日本史の中では、1614~1615 年にかけて起きたキリシタン禁教・大追放にいたる動きの中の前段階として理解されている。ちなみに西欧ではこの事件は 1623 年に刊行されたイエズス会宣教師 Trigault 著のラテン語年代記により知られるようになったが、Trigault の語りによると、本多兄弟は左兵衛が唆した地元有力者が宴会に招き、その席で最近手に入れた刀を披露すると見せかけ、そしてその同じ刀を使って斬殺されたということになっている。このドラマチックな展開はおそらく演劇の材料として適しているとみなされ、このコブレンツ劇以外にも複数の劇で取り上げられていることが確認できている。ただコブレンツ劇の斬新な点は、左兵衛をこの場において統括していたのが史実のように地元の大名有馬直純ではなく、徳川家康自身としていることにある。家康はもちろん当時在命であったが、有馬近辺にはおらずこの事件も直接指示はしていなかったと思われる。ただこの劇では家康を現場に置き、そして古代ローマを題材にした既存の劇を援用して家康を、マルクス・アウレリウス等古代ローマの、基本的に良心的で賢明ではありながらも真の啓示を受けていないため誤った決断をしてしまう指導者として描き出している。なおこの劇では、Trigault 等の著書でも見られる意見ではあるが、フィリピン等日本周辺地域までを植民地化したスペインの膨張主義に脅威を感じたため家康はキリシタン弾圧を決意するという様も描かれている。近世ヨーロッパのカトリック圏における見方としては大胆のようにも思えるが、しかしこの劇が上演されたコブレンツおよび周辺地域も正に(少なくとも一部の見方によれば)スペイン・ハプスブルク帝国の膨張主義と、それに対抗しようとするフランスやスウェーデンのような勢力の間で揺れ動き苦しんでおり、この劇におけるキリシタン弾圧と殉教は、通常のようなカトリック称揚の一面もありながら、他方政治と宗教のせめぎあい一般

が多大な被害を受けている当時のヨーロッパ特にドイツ語圏の現状も投影されている、複雑なものであることを代表者は著書の中で示唆した。

またミュンヘンで 1665 年に上演された劇は、1596 年暮れから 1597 年初頭にかけて起きたいわゆる日本 26 聖人殉教事件の最中に京阪地方で起きた事件を題材にしたものである。当時、大阪では武道継承で有名な小笠原家に連なる小笠原アンドレアなる人物が道場をかまえつつキリシタンとなり宣教師達の世話もしていたが、洗礼を受けたばかりのアンドレアの父が自分は弾圧者達に打ち入りをして殉教するのだと主張し、これは正しい殉教方法ではないと周りが説得するのに苦労したというエピソードで、欧州には最初ルイス・フロイスによって報告されたものである。ミュンヘン劇ではアンドレアの父が意図的にかそうでないかは分からないが大阪奉行所の別のキリシタン、ヴィクトル野田源助と混同されているため劇の主人公の名もヴィクトルとなっているが、正確には主人公は小笠原アンドレアの父である。ちなみにこの劇が企画・上演された直接のきっかけとしては、1663 年～1664 年にかけて起きたオスマントルコとハプスブルク帝国との戦争の中で、ミュンヘン学院のパトロンであったフッガー家の一員フランツ・フッガーの戦死があった。これは劇に付随する 1 次文献やほか関係 2 次文献を精査することによって明らかになったことであるが、フッガーはこの異教徒との戦争において一種の殉教者として倒れたのであるという言説が生じ、そこで彼がこの日本の、同じく高貴な家柄で戦士としてキリスト教弾圧に抵抗したと伝えられた小笠原家の一員およびヴィクトル野田源助に重ね合わされるようになったと考えられる。いずれにせよこの劇も、ドイツと日本の貴族の矜持、そして欧州と東ヨーロッパにおけるキリスト教対異教の戦いを意図的に重ね合わせた興味深いものであり、これによって日本の細かい情報がいわゆる禁教が始まってからも西欧では受容され続け、プロパガンダ的・教育的用途に使われ続けたことが確認できた。

本研究では上記をまとめた単著出版が一番の目に見える成果となった。また上記 1 でも記したように、以前のオーストリアとの二国間共同研究で準備が始まった共著論文集を完成させたことも成果の一つとなった。さらにほか複数の論文や学会発表も成果としてあり、特に最終年度となった 2022 年度の終わりに、イタリア・ローマで日本関係の近世ラテン語文献についてまとまった講演を行えたことは、この後の研究継続のためにも大きな意義があったと考える。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 2件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Watanabe, Akihiko	4. 巻 58
2. 論文標題 De Iaponibus, qui inde a saeculo XVI usque ad XXI textus Latinos composuerint	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Vox Latina	6. 最初と最後の頁 58-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Watanabe, Akihiko	4. 巻 0
2. 論文標題 The Japanese Senex Iratus: The Munich Victor Play	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Japan on the Jesuit Stage: Transmissions, Receptions, and Regional Contexts	6. 最初と最後の頁 320-331
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 渡邊 顕彦	4. 巻 -
2. 論文標題 羅話辞典420年の歴史(邦題)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Foreign Languages Research/外語研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 Watanabe, Akihiko	4. 巻 19
2. 論文標題 Catholicism, Early Modern Japan, and the Greco-Roman Classics	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Itineraria	6. 最初と最後の頁 197-213
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 Akihiko Watanabe
2. 発表標題 De Iaponibus qui inde a saeculo XVI usque ad XXI textus Latinos composuerint
3. 学会等名 Latinitas et doctrinarum orbis (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Akihiko Watanabe
2. 発表標題 The Staging of Japanese Martyrs in 17th-Century Koblenz and Munich: Contact-Tracing in Early Modern Global Knowledge Circulation
3. 学会等名 The 12th International Convention of Asia Scholars (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 渡邊顕彦
2. 発表標題 近世ラテン語、古典受容と16～17世紀の日本人
3. 学会等名 日本における西洋古典受容 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 渡邊顕彦
2. 発表標題 西洋古典
3. 学会等名 21世紀の人文知とは 世界の古典学から考える (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Akihiko Watanabe
2. 発表標題 Iam fraus liquescit: The Munich Victor Play and Jesuits as Purveyors of Information on Early Modern Japan
3. 学会等名 ICAS 11 (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 Haruka Oba, Akihiko Watanabe, Florian Schaffnath	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Brill	5. 総ページ数 342
3. 書名 Japan on the Jesuit stage : transmissions, receptions, and regional contexts	

1. 著者名 Akihiko Watanabe	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Bloomsbury	5. 総ページ数 272
3. 書名 Japan on the Jesuit Stage: Two 17th-Century Latin Plays with Translation and Commentary	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------